

第4回薬剤耐性リスク管理検討会 議事概要

日 時：令和4年12月9日（金）～12日（月）

場 所：書面による開催

出席者：メンバー（敬称略）：鬼武一夫、河合一洋、呉克昌、鈴木里和、田村豊、橋本信一郎

主な議題と議事概要

<成果指標案について>

【事務局案】（2022年12月時点）

- 2027年の健康家畜由来大腸菌のテトラサイクリン耐性率を牛では16%以下、豚では42%以下、鶏では43%以下に低下させる。
- 2027年の健康家畜由来大腸菌の第三世代セファロスポリン耐性率を牛では0.2%以下、豚では0.7%以下、鶏では1.5%以下に低下させる。
- 2027年の健康家畜由来大腸菌のフルオロキノロン耐性率を牛では0.1%以下、豚では1.4%以下、鶏では8.2%以下に低下させる。
- 2027年の畜産分野の動物用医薬品のうち、抗菌剤の全使用量を20%削減する（2020年水準を起点）
- 2027年の畜産分野の動物用医薬品のうち、第二次選択薬（※）の全使用量について、27t（2020年水準）以下に維持する。
※第三世代セフォロスポリン、15員環マクロライド（ツラスロマイシン、ガミスロマイシン）、フルオロキノロン、コリスチン

【委員からの御意見】

- 全体として、前回の検討会で委員から出された意見等をくみ上げて、理論的に根拠ある指標値が設定されている。
- 畜種別に耐性率が示され、合理的な指標が提示されたものとする。
- 成果指標の使用量には、製造販売量が便宜上用いられている。販売と使用にはタイムラグ等もあり、状況を正確に把握するため、使用量を把握する体制の整備が有用な課題と考える。
- 今回は時期尚早と思われるが、伴侶動物の使用量や耐性率も成果指標を設定することについても今後検討が必要。
- 大腸菌のテトラサイクリン耐性率の目標値を、上昇傾向がある畜種の場合は過去の最小値としているが、ばらつきのあるデータの最小値を目標とするのは科学的根拠としては弱いのではないかと。上昇トレンドがあるのであればより現実的に現状（直近3-5年間の平均）以下にする、といった方が良いのでは。無理な目標値は「達成できなくても仕方がない」となる危険性があるように思う（ヒト分野でも同様であった）。
- 第3世代セファロスポリン耐性率について、牛と豚については2019年の耐性率がやや高いことに

より回帰直線が右肩上がりになっているが、これは統計学的に有意ではないのではないかと。鶏についてもこの分布を見て上昇傾向とするのは妥当ではないように思う。最低限回帰係数とP値を提示してほしい。豚の2019年が突出して高く、この値が平均値に影響を及ぼしている可能性はないか（大腸菌のフルオロキノロン耐性についても同様の問題あり）。

- 動物用抗菌剤の使用量削減の目標は耐性率よりも直接的な介入が可能であり（取組成果が反映されやすい）、より前面に出すと良いと思う。
- 豚由来大腸菌のテトラサイクリンに対する耐性率の42%以下は根拠が不十分で撤廃するか見直すべきと考える。その理由は、① 前回のアクションプランの期間における豚のテトラサイクリンの販売数量低下が耐性菌率低下に結びついていないこと、② 農研機構動物衛生研究部門が実施した研究において、テトラサイクリンの使用中止の介入を行った農場で必ずしもテトラサイクリンの使用中止が耐性率の低下につながらず、他の抗菌剤（ST合剤）の使用などの影響も示唆されたこと、③ 第3世代セファロスポリンやフルオロキノロンの目標のように、G7と同水準とするという考え方を参考にすべきではないかと考える。
- 豚由来大腸菌の第3世代セファロスポリン及びフルオロキノロンに対する耐性率は、0.7%及び1.4%は良いが、G7水準よりはるかに低い水準であり、人医療で使用される重要な抗菌剤であるがゆえに設定される「G7と同水準よりも低い意欲的な目標である」ことを明記すべきと考える。
- 豚の抗菌剤販売量の92.6tの削減目標は、2023年1月からの格付け基準改定（上物の上限重量が3kg重くなる）を考慮し、4%程度少なくすべきと考えるので検討いただきたい。過去の平均枝肉重量は約78kgであるが、格付け基準改定により81kg程度となることが予測でき、約4%の増加である。生産頭数が増えなくとも、この枝肉重量4%増を考慮して、削減目標は89t程度とすべきと考える。